

明治期新聞小説の世界

——「高峯廻夜嵐」の読解にむけて——

橋 弘 文

1

「高峯廻夜嵐」と題する読み物の連載が、明治期に高知県で発行されていた『土陽新聞』で、明治16年(1883)4月22日(日曜日)から始まる。「高峯廻夜嵐」は、その連載開始の時点からおよそ11年前の明治4年(1871)の暮れに高知県の西北山間部で起こった一揆をテーマにした読み物だった。この一揆は、明治初期に西日本を中心にして各地で勃発した徴兵制反対一揆、いわゆる血税一揆の一つに位置づけられている。

歴史学者の平尾道雄はいちはやく高知県の西北山間部で起こった一揆の概略と史料を提示している¹⁾。この一揆は、「異人が膏を取る」といううわさが、この一揆のきっかけになったところから、土佐膏取り一揆とよばれている。土佐膏取り一揆の中心地は池川郷と本川郷で、竹本長十郎と山中陣馬がそれぞれの地域の一揆の指導者となっていた。「高峯廻夜嵐」は竹本長十郎と山中陣馬の行動に焦点をあわせつつ、一揆をめぐるさまざまなエピソードを描いている。

これまで「高峯廻夜嵐」は土佐膏取り一揆の研究において十分に分析されてこなかったと思われる。おそらく「高峯廻夜嵐」の読み物としての特色が、虚実入り交じりの作品としてみなされて、実証性にもとととされてきたのではないだろうか。しかしながら、「高峯廻夜嵐」に含まれると想定される虚構性は、民俗学の伝説研究からアプローチするとき、新たな意味を帯びようになる。

近年の伝説研究は、「ほんとうにあったこと」として語られる伝説を単に事実と虚構に分解するだけでなく、伝説を語る人びとが、どうして「ほんとうにあったこと」として語ってきたかについて多角的な視点から研究

を重ねている²⁾。「高峯廻夜嵐」が、土佐膏取り一揆をめぐるさまざまな伝説のヴァリエント(異話)の一つとしてとらえられるならば、「高峯廻夜嵐」の虚構性は、人びとが過去の事件をどのように語ったかという問題を考えるうえで、重要な意義をもつことになるはずである。

2

「高峯廻夜嵐」が連載されていた『土陽新聞』は、高知における自由民権派の機関紙だった。下村公彦の研究³⁾をもとに「高峯廻夜嵐」の連載開始ころまでの『土陽新聞』の発行経過をたどってみよう。

明治15年(1882)7月14日、自由民権派の機関紙の『高知新聞』が発行禁止処分を受ける。『高知新聞』はこの処分に対抗して、『高知自由新聞』を新たに発行し、発行禁止処分を受けた『高知新聞』の葬儀を7月16日におこなっている。

明治15年(1882)7月21日、『高知自由新聞』が発行禁止処分を受ける。自由民権派は、前回の処分の際の対応と同じように、新しい新聞を発行する。これが『土陽新聞』である。『高知自由新聞』の葬儀が7月26日におこなわれている。

明治15年(1882)8月24日、『土陽新聞』は発行停止処分を受ける。明治16年(1883)1月、『土陽新聞』は再発行される。明治16年(1883)5月、『土陽新聞』は『土佐新聞』を合併吸収する。

このように『土陽新聞』は明治期において、高知の自由民権派の機関紙の『高知新聞』の系譜をひく新聞であった。

「高峯廻夜嵐」は明治16年(1883)4月22日(日曜日)付けの『土陽新聞』202号から、同年10月23日

(火曜日) 付けの 345 号にかけて断続的に連載されている。この期間の『土陽新聞』の紙面は、通常、雑報欄と連載の読み物と広告欄から構成されている。雑報欄には全国の自由民権派の動向を中心にして日本の各地の事件が報道されている。とくに高知県内の出来事はくわしく報道されている。いっぽう、外国の事件の報道もみられる。

『土陽新聞』の活字には変体仮名が含まれ、ほとんどの漢字には読み仮名が付けられている。『土陽新聞』の連載読み物には挿し絵が描かれることが多い。『土陽新聞』は自由民権派の機関紙であったが、同時に広い読者層を想定した、娯楽性をそなえた新聞でもあった。『土陽新聞』は、「日本における約 140 年にわたる新聞の歴史の草創期に登場し、新聞の大衆化に貢献した」⁴⁾ 小新聞の一つであったといえるだろう。

『土陽新聞』とその母胎となる『高知新聞』は、坂崎紫瀾・宮崎夢柳・和田稲積などの明治期の新聞界の論客を輩出している。『土陽新聞』は明治期における単なる地方の一小新聞ではなく、その当時の日本における重要な小新聞の一つとして受容されていたと思われる。

3

明治 10 年代の小新聞は、実際に起こった事件を題材にした読み物を次から次へと生み出していった。亀井秀雄はそれらの読み物の特色を文学史研究の文脈で次のようにのべている。

仮名垣魯文の『高橋阿伝夜刃譚』のように、現実に関わった事件に基づく物語を、当時は実録小説と呼びました。もともとそれは小新聞の「つづきもの」から始まったため、事件の起こった場所や日時を克明に書き込む、という特徴を持っています。江戸時代には、現実に関わった事件を物語化する場合、時代や場所の設定を、室町時代や鎌倉時代に移し変えるのが一般的でした。江戸文学の研究者によれば、これは当時の物語作者が、現実の事件をそのまま物語化した場合、徳川幕府から政治批判として受け止められ、処罰されるのを恐れたためだ、ということになっています。本当にそれだけが理由だったかどうか、疑問がないわけではありません。ただ少なくとも徳川時代のそのような物語作法に較べて、小新聞から始まる実録小説のトポロジー（場所設定の方法）やクロノロジー（年代記の方法）がいかに新しかったか、容易に察しがつくと思

います⁶⁾。

亀井秀雄は、トポロジー（場所設定の方法）とクロノロジー（年代記の方法）のあり方に加えて、明治期の実録小説の特色として、「現地の探訪記者からの報告を盛り込む傾向」を指摘している。こうした特色は「高峯廻夜嵐」にもみることができる。

「高峯廻夜嵐」は新しいトポロジー（場所設定の方法）とクロノロジー（年代記の方法）を通して、土佐膏取り一揆にかかわっていた人びとの生活とさまざまな人々との関係を描き出している。「高峯廻夜嵐」は、平家の落人とその子孫、親と子、男と女の恋愛、夫と妻、力士と力士の競い合い、力士とパトロン、親分と子分、友人、陰陽師、よそ者、武士と農民、官吏と住民、村に住む人と町に住む人、参事と巡卒、などの諸関係を語る実録小説である。

また、「高峯廻夜嵐」は「現地の探訪記者からの報告を盛り込む傾向」を通して、明治 4 年（1871）の農民一揆を明治 10 年代の自由民権運動に結びつけようとしている。「高峯廻夜嵐」は、過去の農民一揆を自由民権運動の先駆として位置づけることによって自由民権運動の理解を広めようとしているのである。「高峯廻夜嵐」の最終回にみられる以下の記述は、こうした態度を端的に示している。

噫長十郎一匹夫にして吾川土佐高岡三郡の士民を煽動して一揆を起し県官を劫かし村吏を縛り一時県下を動乱せしを以て賊名を負ひ身首所を殊にして斃る是畢竟頑陋偏執法度政令の主旨を瞭了せざるより事の此に出たるに由と雖當時藩治専制の威権未だ其痕跡を脱せざる下に屈せず敢て一県の中奮つて自ら三郡の巨魁となり竹槍席旗に據て自己を圧束する所の法制を破懐せんと欲し万死尚辞せざるに至つてハ又我南海農民中近世罕に観る所の奇男子と云ふとこと茲に十餘年即ち明治十六年の聖代に當つて吾川郡中の有志諸氏が竹本氏の為に其精神の民権を發揮するに外ならず其志業成らずして没せしを追嘆し同郡川口村に於て一個の紀念碑を建設し長く同氏の俠名をして湮滅せしめざらん事を謀り本年春夏の交より屢集會して専ら協議中なりとぞ

「高峯廻夜嵐」の作者は、土佐膏取り一揆の指導者の竹本長十郎の行動に民権の精神を重ねようとしている。明治の自由民権運動が発生する以前の一揆に、自由民権

運動の精神を見出し、それらの一揆の伝承を掘り起こし、自由民権運動の歴史を創造するという方法は、小室信介が明治16年(1883)から17年(1884)にかけて編集し、発行した『東洋民権百家伝』に顕著なかたちでみることができる⁷⁾。

「高峯廻夜嵐」は、一揆の指導者の竹本長十郎や山中陣馬の行動に理解を示しているが、いっぽう、一揆を直接に鎮圧する林有造参事をはじめ巡卒などの人びとの行動に対しても一定の理解を示している。これは「高峯廻夜嵐」連載時における林参事の政治的な立場にかかわっていると思われる。明治10年代、林参事は自由民権派の活動家であった。

「高峯廻夜嵐」の「高峯」は一揆の舞台となった高知県西部の黒森山をさしている。「高峯廻夜嵐」の「夜嵐」は一揆の比喩表現と思われるが、「高峯廻夜嵐」第廿二回において、一揆の鎮圧に向かう西田彦太郎にかんして次のような記述がみられる。

西田辞令書を懐中なし権参事に辞して旅宿へ帰り取物も取敢ず一刀腰にぼつ込で彼地を差て駈出る折しも極月廿二日夕陽西山に沈み寒風肌を吹て□を生ぜしめ道路水結して歩行を難ましむ既にして漸やく吾川郡□内坂に上りたるに西北の方に當つて火の光天をこかし炮聲さへ聞ゆるにぞ是必定一揆の大勢間近く押し来るならん最早此勢ひにては無事に狩山へ入込む事は能ふまじと少しく足をゆるめつつ且ある旅店を叩いて秒時休息し廳で灯提を買ひ求めて又道を急ぎ伊野村を過ぎ日下村まで来りしに火勢殆んど微かなり扱は彼が押し来るにては無りしかと心激まし行く程に岩目地も跡に見て越知村に至りし頃は夜も痛く更け渡り彼の火の光りも全く消へ四辺蕭殺として萬籟聲なく唯音つる物とては峯より吹降す夜嵐の仁淀川面の水波を動揺かす響きのみなりき

西田彦太郎は、「唯音つる物とては峯より吹降す夜嵐の仁淀川面の水波を動揺かす響きのみなりき」なかを急いでいる。「夜嵐」は一揆を鎮圧しようとする西田らの前に立ち向かってくる。そして「高峯廻夜嵐」最終回は次のように終わっている。

其初め黒森なる高峯の夜嵐に三郡を吹靡し其勢ひ一時県庁までも揺動せしにより是を高峯の夜嵐と題し本回を以てこの大團圓とはなしつ

4

「高峯廻夜嵐」は以下のような年月日の『土陽新聞』に掲載された。

「高峯廻夜嵐」発端：明治16年4月22日(日)『土陽新聞』202号。

「高峯廻夜嵐」第一回：明治16年4月24日(火)『土陽新聞』203号。

「高峯の夜嵐」第二回：明治16年4月26日(木)『土陽新聞』205号。

「高峯廻夜嵐」第三回：明治16年4月28日(土)『土陽新聞』207号。

「高峯廻夜嵐」第四回：明治16年4月29日(日)『土陽新聞』208号。

「高峯廻夜嵐」第五回：明治16年5月1日(火)『土陽新聞』209号。

「高峯廻夜嵐」第六回：明治16年5月2日(水)『土陽新聞』210号。

「高峯廻夜嵐」第七回：明治16年5月4日(金)『土陽新聞』212号。

「高峯廻夜嵐」第八回：明治16年5月5日(土)『土陽新聞』213号。

「高峯廻夜嵐」第九回：明治16年5月8日(火)『土陽新聞』215号。

「高峯廻夜嵐」第十回：明治16年5月10日(木)『土陽新聞』217号。

「高峯廻夜嵐」第十一回：明治16年5月12日(土)『土陽新聞』219号。

「高峯廻夜嵐」第十二回：明治16年5月30日(水)『土陽新聞』221号。

「高峯廻夜嵐」第十三回：明治16年6月1日(金)『土陽新聞』223号。

「高峯廻夜嵐」第十四回：明治16年6月3日(日)『土陽新聞』225号。

「高峯廻夜嵐」第十五回：明治16年6月6日(水)『土陽新聞』227号。

「高峯廻夜嵐」第十六回：明治16年6月8日(金)『土陽新聞』229号。

「高峯廻夜嵐」第十七回：明治16年6月10日(日)『土陽新聞』231号。

「高峯廻夜嵐」第十八回：明治16年6月13日(水)『土陽新聞』233号。

「高峯廻夜嵐」第十九回：明治16年6月15日（金）『土陽新聞』235号。
 「高峯廻夜嵐」第二十回：明治16年6月17日（日）『土陽新聞』237号。
 「高峯廻夜嵐」第二十一回：明治16年6月20日（水）『土陽新聞』239号。
 「高峯廻夜嵐」第二十二回：明治16年6月22日（金）『土陽新聞』241号。
 「高峯廻夜嵐」第二十三回：明治16年6月24日（日）『土陽新聞』243号。
 「高峯廻夜嵐」第二十四回：明治16年6月28日（木）『土陽新聞』246号。
 「高峯廻夜嵐」第二十五回：明治16年6月30日（土）『土陽新聞』248号。
 「高峯廻夜嵐」第二十六回：明治16年7月3日（火）『土陽新聞』250号。
 「高峯廻夜嵐」第二十七回：明治16年7月5日（木）『土陽新聞』252号。
 「高峯廻夜嵐」第二十八回：明治16年7月8日（土）『土陽新聞』255号。
 「高峯廻夜嵐」第二十九回：明治16年7月11日（水）『土陽新聞』257号。
 「高峯廻夜嵐」第三十回：明治16年7月14日（土）『土陽新聞』259号。
 「高峯廻夜嵐」第三十一回：明治16年7月17日（火）『土陽新聞』261号。
 「高峯廻夜嵐」第三十二回：明治16年7月19日（木）『土陽新聞』263号。
 「高峯廻夜嵐」第三十三回：明治16年7月21日（木）『土陽新聞』265号。
 「高峯廻夜嵐」第三十四回：明治16年7月23日（月）『土陽新聞』267号。
 「高峯廻夜嵐」第三十五回：明治16年7月26日（木）『土陽新聞』270号。
 「高峯廻夜嵐」第三十六回：明治16年7月29日（日）『土陽新聞』273号。
 「高峯廻夜嵐」第三十七回：明治16年8月1日（水）『土陽新聞』275号。
 「高峯廻夜嵐」第三十七回：明治16年8月3日（金）『土陽新聞』277号。
 「高峯廻夜嵐」第三十八回：明治16年8月9日（木）『土陽新聞』282号。
 「高峯廻夜嵐」第四十回：明治16年8月11日（土）『土陽新聞』284号。

「高峯廻夜嵐」第四十一回：明治16年8月15日（水）『土陽新聞』287号。
 「高峯廻夜嵐」第四十二回：明治16年8月17日（金）『土陽新聞』289号。
 「高峯廻夜嵐」第四十三回：明治16年8月21日（火）『土陽新聞』292号。
 「高峯廻夜嵐」第四十四回：明治16年8月25日（土）『土陽新聞』296号。
 「高峯廻夜嵐」第四十五回：明治16年9月6日（木）『土陽新聞』306号。
 「高峯廻夜嵐」第四十六回：明治16年9月9日（日）『土陽新聞』309号。
 「高峯廻夜嵐」第四十七回：明治16年9月12日（水）『土陽新聞』311号。
 「高峯廻夜嵐」第四十八回：明治16年10月2日（火）『土陽新聞』328号。
 「高峯廻夜嵐」第四十九回：明治16年10月4日（木）『土陽新聞』330号。
 「高峯廻夜嵐」第五十回（上）：明治16年10月7日（日）『土陽新聞』333号。
 「高峯廻夜嵐」第五十回下：明治16年10月9日（火）『土陽新聞』334号。
 「高峯廻夜嵐」第五十一回：明治16年10月10日（水）『土陽新聞』335号。
 「高峯廻夜嵐」第五十二回：明治16年10月12日（金）『土陽新聞』337号。
 「高峯廻夜嵐」第五十三回：明治16年10月16日（火）『土陽新聞』340号。
 「高峯廻夜嵐」第五十四回：明治16年10月19日（金）『土陽新聞』342号。
 「高峯廻夜嵐」第五十五回（大尾）：明治16年10月23日（火）『土陽新聞』345号。

「高峯廻夜嵐」はほぼ2日に1回のわりに連載されている。ただし第四十七回と第四十八回のあいだに日数があいている。第四十八回の前文は「原稿者」の事故をその理由にしている。また第三十七回が重複しているが、第四十回の文末で前々回の三十七回は三十八回の誤りで、前回の三十八回は三十九回の誤りであると訂正している。

「高峯廻夜嵐」は第五十回下をのぞいてすべての回に一つの挿し絵をつけている。挿し絵は二段抜きのものもあり紙面に占める割合が大きい。挿し絵はその回の記述に関連する場面を描いているものと、次回の場면을予告

編のように描いているものと、そして前回の場面を回想のように描いているものがある。

「高峯廻夜嵐」の題字は、「峯」が「峰」に、また「廻」が「の」や「廻」に転じている場合がみられる。

5

「高峯廻夜嵐」発端の前文は、「高峯廻夜嵐」の作者は原水子で、原水子の原稿に『土陽新聞』の記者の柏陰が手を加えたとのべている。また第四十八回の前文は作者についてこのべている。

記者白す本編は発端にも辨せし通り元原水子及び森郷某氏よりの寄稿に據て編輯せし……

森郷某氏は発端の前文ではふれられていない。「高峯廻夜嵐」の制作過程には二つの可能性が考えられる。一つは最初から最後まで原水子と森郷某氏の原稿を『土陽新聞』の記者の柏陰が編集して作品化する制作過程である。今一つは、発端から途中のある段階までは原水子の原稿に基づき、ある段階以降は森郷某氏の原稿に基づき、柏陰がそれらを編集して作品化する制作過程である。原水子、森郷某氏、そして柏陰はそれぞれどのような人物だったのだろうか？

「高峯廻夜嵐」発端は、竹本長十郎の先祖の伝説を語っている。話は源平の戦いにさかのぼる。平家方の軍は源氏に破れ讃州八島に敗走する。平家の公達の一人、小松内大臣重盛の末子の侍従土佐守宗賢は、身重の妻の美濃を家来で乳母子でもある瀧口兵部に託す。瀧口兵部は美濃をつれて戦火の八島を抜け出し四国の伊豫にたどりつく。瀧口兵部と美濃の一行は、伊豫の越知三郎の館に滞在する。美濃は男子を出産するが、産後の経過が悪く亡くなってしまふ。生まれてきた男子は笹丸と名づけられる。やがて平家残党の追跡が越知三郎の館におよぶ。瀧口兵部は笹丸を背負い、土佐をめざして落ちのびるが、その途中、山の中で道に迷ってしまう。瀧口兵部は山間のある家に一晩の宿を借りる。その家の主人はささやかながらも心づくしに瀧口兵部と笹丸をもてなす。瀧口兵部は笹丸が成長するまでその山中に隠れて暮らそうと決意し、その思いをその家の主人に伝える。その家の主人は喜んで瀧口兵部の願いを受け入れる。その後瀧口兵部と笹丸は土佐の山間の老夫婦の家で暮らすが、やがて瀧口兵部と老夫婦は亡くなる。笹丸は元服後、その老夫婦の家を継ぎ、竹本孫右衛門と名乗るようになる。後

に竹本長十郎は竹本孫右衛門(平重盛の孫、笹丸)の子孫として、天保10年(1839)正月元日に、竹本孫平とその妻、お瀧のあいだに誕生することになる。

「高峯廻夜嵐」発端の物語は、土佐の山間部のある家がどのようにして平家の子孫となっていったかというプロセスを語っている。

竹本長十郎は一揆にさいして、「小松内府の末裔なりと自称し、世論の動揺するに及んで、平兵部輔の名をもつて衆に呼びかけた」という。「高峯廻夜嵐」発端の物語は、「平兵部輔」という名前の由来を説明していると考えられる。「平」という姓は平重盛の孫である笹丸の子孫であることを表し、「兵部」という名の一部は、笹丸を助けた瀧口兵部の名前からとられているのではないだろうか。

「高峯廻夜嵐」発端の挿し絵は、鎧姿の瀧口兵部が背中に笹丸を背負い、土佐の山中の家の前にたたずむところを描いている。この挿し絵は、竹本長十郎の先祖形成の絵といえよう。平重盛の孫の笹丸は平家伝承の先祖を表し、鎧姿の瀧口兵部は平家伝承の仲介者であり、そして山中の家は後に笹丸の養家となり平家伝承の容器となる。

土佐膏取り一揆の実録小説はこのような伝説的な語りから始まる。一揆という実際の事件は、「高峯廻夜嵐」において伝説と融合しているのである。したがって「高峯廻夜嵐」の読解のためには、土佐膏取り一揆で実際におこった出来事だけでなく、土佐膏取り一揆という過去の事件をふりかえる人びとの伝説的な思考についても考えなければならないだろう。

6

「高峯廻夜嵐」が掲載されている『土陽新聞』は、高知県立図書館にマイクロフィルムで所蔵されている。このマイクロフィルム版の『土陽新聞』には不鮮明な箇所が多くみられる。おそらく撮影された原本の傷みがひどかったせいであろう。より正確な翻刻をするためには、他の機関に所蔵されているマイクロフィルム版との比較検討、そして原本の探査が必要である。それは次の課題とし、この稿では、「高峯廻夜嵐」の発端を翻刻して、「高峯廻夜嵐」の読解が土佐膏取り一揆の研究にとって不可欠であることを指摘したい。翻刻にあたって不鮮明な箇所を□で示した。原文にある振り仮名は煩瑣のため省略した。

〈翻刻〉「高峰廻夜嵐」 発端

此一編は原水子より寄せられし原稿なるを弊社の柏陰が聊か蛇足を加へ本日より続々看官諸君の瀏覽を煩らはすべし

人皇八十一代安徳天皇の御宇におよんで平家の一門木曾義仲の為に都を追落され遠く西海の浪に漂ひしが後攝州一の谷に城郭を構へ源氏の兵を防ぎしも義経の武略にて片時の中攻抜かれ再び讃州八島へと落行し宗徒の人々の其中に侍従土佐守宗賢と呼ぶるあり小松内大臣重盛の末子にて弱年なれど父大臣に似て武勇勝れ思慮深かりけり頃は元暦二年義経勝浦の味方を打破り大軍八島へ攻め寄ると聞へければ其夜侍従は乳母子瀧口兵部を側近く召し汝は我乳兄弟なれば今一個の密事を託するなり必らず辞退すましきぞとある兵部畏りて這は勿体なき事承るもの哉君の仰何條背き奉るべき身に協はぬまでもと存し参らすものをと申ける侍従打頬笑まれいしくも申たれ然らば宗賢が託する仔細を語る□し予一の谷にて備中守殿（兄帥盛をいふ）と共に討死すべかりしを思ひの外に困を斬り抜け今日までは在生つれど明日の戦には生て再び帰るまじと覚悟せり只心に懸るは美濃が事なり予未だ子といふものを持たねば彼れが腹に宿せし我種出産の後は如何なる寺院へなりとも遣わし尼法師ともして一門の菩提を吊らはせてよ此事汝ならては託すべき者なし今宵窃かに美濃を伴なひ何所へなりとも立つ退けかしと宣まふを兵部頭をさげ仰せには候へども主君の討死せらるるを余所に見て婦人の伴して立退くといふ云う甲斐なき事や候曲て此儀は余人に仰下さるべしと言せも果ず声あらげ怪しかる事を申ものかな汝最前は何と申せしぞ敵の来らぬ其間に早疾く落よと急立らるるを兵部尚押返しせめては君の御先□をも見参らせて後兎も角も仕らめと申けれども侍従更らに許したまわざれば君命今は黙止難く此上は是非に及はず仰承りぬと答けれども是が主従長き別れと思へば了得名残の惜まれて覚へず鎧の袖を濡しつつ罷り出ぬ抑此美濃と云る女房は五條少将時綱の娘にて容姿世にすくれたるのみならで心様も優にやさしかりしかば侍従年頃忍びて深く契られ舟の中迄引具せられぬ翠帳紅閨に替れるは埴生の小屋の葦簾薫爐の煙に異なる泉郎の藻□火賤き中に交らふにつけても尽せぬ襟ひに紅の涙絶ず緑の黛乱れ来て其人ともみへず哀れにいたわしかりける兵部参りて侍従の呉々頼み聞へ玉ひし趣き申出けるに女房はらはらと涙を流し遙々是迄附慕ひ参り□□□□志をばいかばかりとも思され

ずや侍従殿もし然□覚悟思し立給ふに妾何條存命べきもし不思議に此世を忍び過すとも心に任せぬ世の慣ひは思はぬ外のことも出来りもぞする夫も思へば心憂し此事よきに申上られ玉はれとて中々聞入らるる様もなかりしに折柄東の方に當りて鯨波声間近く聞へ鼓の音轟き渡り敵の大軍攻□□なれば南無三寶油断せしかと瀧口兵部美濃の方を□□□□其処を立出で或は手を引背に負杯し辛ふして□の目より□辺の方へと走り出自己が手勢に守らせさきの舟に乗せ態と二三人の水手舵取計りを具して伊豫□□さしてのり出せしに折節風追手にて瞬く間に豫州今□（現今の今治ならん）へ着ければ急ぎ是より上陸なし少しの知縁なるをもて同國越知郡の武士越知三郎といへる者方へ便り暫く身を隠し居たるうち美濃の方は幾程もなく産の氣つきたて玉の様なる男子を産落されしかば兵部の悦大方ならず源氏の疑を避ん為にや名をバ笹丸と呼なし愛寵しめしが女房は産後の疲れに水腫の病加はり医療手を尽せども更に其験なく世になき人の数に入れぬ兵部悲嘆の涙にくれ泣々野辺一片の烟となし只管遺形見の笹丸の生長を待暮せし所先年平家の一門尽く壇浦にて滅亡し今は源氏の世となりしが其頃諸国に平家の子孫潜伏する由聞へければ鎌倉より伊豫の守護職へも探し出し誅戮すべき旨嚴重に沙汰ありければ瀧口主従心安からず思ふ所へ忽ち訴人有りて越知三郎にこそ平家の公達をかくまひ置たりと告るや否や夫搦取つて鎌倉殿の恩賞に預かれと地頭の令に五十騎斗り其夜越知の館を取囲み公達渡せと呼はりたり兼てより覚悟なしたる瀧口兵部鎧取つて投掛つ四才になる公達を背負ひ承塵に掛たる薙刀押取り群がる捕手の真中へ割て入右になぎ左に払らひ當るを幸ひ斫立るに堪へかねてバツと引透を覗ふてツト駈抜け山手の方へ走りしをソレ逃すなど追かくるを二三度斗りも踏とまりまくり立ては駈け抜つ兎角する中追手の人影も見へずなり凡十里も来らんと思ひし頃夜はいたく更け前後左右嶮山幽谷にして小雨さへ降り出し峯に叫ぶ猿の声千艸に集く虫の音さへいと物凄く殊□腹中飢つかれ今は一步もすすまねば了得大剛の瀧口も進退究して居たりしが且見れば右手の森の中より微かに火影の見ゆるにぞ又手はアレこそ人家ならめと心悦び気を激まし坂を越へ谷を渡り漸く一個の柴垣結ひし門口へこそ到りける枝折戸トトト叩き大音にて是は豫州より土佐へ参る者なるが道踏迷ひいと難義に存ずるなり憫一夕の宿をも貸し一椀の飯をも救ひたまわれとぞ申しける宅より応と答へて肌松燈し年齡五十路斗りの老夫出来り兵部を見て驚きたる体にて何人ぞ

と問ふ兵部答へて我々は瀧口兵部と申すもの背なるは主人の兎にておわすなり聊仔細あれは今明白には語りがたし只願ふは今宵の一宿をといふに由縁ある人と思ひけん□は噫疲れ玉はん物□しくおわすらん率来ませト内に伴ひ見らるる通りの荒破屋なれど苦しからずは休息したまへとて頓て粟の餅に麦飯濁酒杯出し来りければ兵部其他自なきもて成しに心落付き先笹丸に粟餅を勧め自から酒飯を喫し互みに打くつろぎて話のうち兵部熟々と考ふるに今より又里近き所杯へ出んより此山中こそ世を忍ぶ身には求めても無き屈究の場所なりと早くも心に決断なし遂に主従の素性を明し笹丸成長の時分迄匿まひ呉る□頼みし□老夫甲斐がいく請引なし妻を召んで対面させ夫より笹丸を我子の如く思ひ疎略ならず養育せし中兵部老夫引続き五六年の間に死亡なし笹丸元服して此家を継ぎ竹本孫右衛門と名乗りしより後の話もありぬれど遠き昔語余り緯長きを厭ひ只其祖先来歴の一斑を示して本編の端緒とし第一回より又号を追つて説出づべし

注

- 1) 平尾道雄『土佐農民一揆史考』高知市民図書館、1953年。
- 2) たとえば、小松和彦編『記憶する民俗社会』人文書院、2000年。
- 3) 下村公彦「民権派の新聞『江南新誌』」高知県立歴史民俗資料館編『土佐歴史の遺品 1』高知県文化財団、1992年。
- 4) 土屋礼子『大衆紙の源流 明治期小新聞の研究』世界思想社、2002年。
- 5) 亀井秀雄『明治文学史』岩波書店、2000年。
- 6) 明治期の実録小説が日本文学史においてもつ重要性は、本田康雄『新聞小説の誕生』平凡社、1998年、山田俊治『大衆新聞がつくる明治のく日本』NHKブックス、2002年、などにおいても指摘されている。
- 7) 小室信介編・林基校訂『東洋民権百家伝』(岩波文庫)、1957年。